

来週の『売り物記事』はこれ



2017年3月31日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

旧東ドイツ・秘密警察「シュタージ」の爪痕 4月2日（日）



ストーリー

毎週日曜掲載の長編記事「ストーリー」で、初めて一つのテーマを上・下の2回に分けて描きます。取り上げるのは旧東ドイツの秘密警察「シュタージ」。尾行、盗聴、暗殺工作……政府に成功する勢力を封じ込めるためにあらゆる手段を使い、「世界最大規模の監視国家」を支えた組織です。多くの市民の人生を破壊したにもかかわらず、その責任はほとんど問われな



いまま、解体から四半世紀余りがたちました。皮肉にも旧東ドイツ消滅のきっかけになったのは、シュタージが関与した人気歌手、ボルフ・ビーアマンさんの国外追放処分です。処分に対する反対運動は政府の予想を超えて広がり、そのうねりが「ベルリンの壁」崩壊へとつながります。80歳になるビーアマン氏とシュタージ中枢部にいた元中佐ら関係者の証言を織り交ぜながら、今もベルリンに残るシュタージの爪痕を浮かび上がらせませす。

日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待下さい。

人手不足に過剰サービスで現場は悲鳴 宅配便の未来とは

夕刊特集ワイド 4月3日（月）



便利で安価。現代人の暮らしに欠かせないサービスとなっているのが宅配便です。ところが、荷物は増え続けるのに十分な人手を確保できず、配達を担うドライバーたちは悲鳴を上げています。最大手のヤマト運輸は、ついに荷物の受け入れを抑える対策に乗り出そうとしています。一方で宅配業界に対しては、超高齢社会の「生命線」としての期待も。どこに問題があり、私たち利用者は何をすべきなのでしょう。立ち止まって考えます。

親ありて・辻井伸行さんの母

くらしナビA面 4月5日（水）

生まれつき全盲のピアニスト、辻井伸行さん（28）は2歳で母いつ子さん（56）の歌声に合わせてピアノを弾き始めました。常に意欲的で、幼いころから才能を開花して、国際的に活躍する伸行さんのそばには、いつも自然体で行動するいつさんがいました。「子育てを通じて、努力すれば夢はかなうと教えられた」と語るいつさんに、話を聞きました。



育休中の就労に注目

くらしナビA面 4月3日（月）



育児休業中の就労が労使双方から注目されています。無理のない範囲で働くことで、職場復帰がスムーズにできます。企業側もうまく活用すれば、休業の影響を抑えられます。テレワークの普及で在宅就労がしやすくなったことも追い風に。男性も育休を取りやすくなるとの声も出ています。導入している企業や団体に実際の様子や課題取材しました。

加藤登紀子・広河隆一对談 おんたのしんぶん 4月3日（月）

旧ソ連・ウクライナのチェルノブイリ原発事故から31年。現地で長年取材してきたフォトジャーナリストの広河隆一さん＝写真＝は、福島第1原発事故後の日本政府の対応を「被害者救援よりも復興が優先されたのです」と批判します。ジャーナリストとして伝えるだけでなく、苦しむ人々を助ける広河さんと、原発、難民、ジャーナリズムについて語り合いました。



山中伸弥・京都大教授の新コラム「走り続けて」 医療福祉面 4月2日



2017年は山中教授＝写真＝が世界で初めてヒトiPS細胞の作製に成功して10年になります。その成果は2012年のノーベル医学生理学賞に選ばれ、国内外の研究者が実用化に向けた研究に取り組んでいます。新コラム「走り続けて」では、山中教授が医療と研究の橋渡し、再生医療を通じて考える社会保障制度、患者たちから学んだことなどについて、現場から発信します。

きょうのセカンドオピニオン 医療福祉面 4月2日（日）

専門の医師が読者の病気の悩みに答える「きょうのセカンドオピニオン」がスタートして、ちょうど1年がたちました。好評につき、新年度からは掲載回数も増やします。これを機に、加齢に伴う神経の病気に関するワイド紙面をお届けします。寄せられた相談の中から多くの方が悩んでいる症状をピックアップし、岩田誠・東京女子医大名誉教授（神経内科）＝写真＝に答えていただきます。



突きつけられる「家族の姿」

【離婚後の親子面会交流】 どう考える？

オピニオン面 【論点】 4月7日（金）



婚姻件数と離婚件数の比較から3組に1組が離婚すると言われる時代、離婚した親と子どもの面会交流のあり方が議論を呼んでいます。離婚後の別居親と子の面会交流を促す「親子断然津防止法案」が国会で議論されようとしています。一方で、DV被害者への配慮がないと法制化を懸念する声も上がります。その議論はまた、「家族とはなにか」を問うているようです。

時代が見える——。オピニオン面にご期待ください。